

患者さんへ

「頸動脈内膜剥離術前に施行する用手的頸動脈圧迫の有用性

に関する後方視的比較研究」

この研究は、通常の診療で得られた記録を使って行われます。このような研究では、国が定めた指針に基づき、対象となる患者さんのお一人ずつから直接同意を得ることが困難な場合には、研究の目的を含む研究の実施についての以下の情報を公開することが必要とされています。

1 研究の対象	2021 年 9 月～2026 年 4 月に当院で頸動脈内膜剥離術（内頸動脈を切開し、プラークを取り除く手術）を受けられた方
2 研究目的・方法	頸動脈内膜剥離術前に用手的頸動脈圧迫を繰り返すことによって術中の血管遮断時に起きる脳虚血に対する耐性（慣れ）の獲得、術中頸動脈洞反射の抑制、術後の過灌流の抑制が得られたかを臨床情報を診療録より取得し、術前に用手的頸動脈圧迫を行わなかった方の臨床情報と比較して検討を行います。 ・ 用手的頸動脈圧迫：頸動脈を手で押さえ血流を止めること ・ 脳虚血：脳への血流が乏しくなる現象 ・ 頸動脈洞反射：頸動脈洞への刺激によって起こる動脈圧が下降する反射現象 ・ 過灌流：血液が流れ過ぎる現象 研究の期間：施設院長許可（2026 年 7 月予定）後～2027 年 3 月
3 情報の利用拒否	情報が当該研究に用いられることについて、患者さんもしくは患者さんのご家族等で患者さんの意思及び利益を代弁できる代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としません。その場合は、「6. お問い合わせ先」までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。 ただし、ご了承頂けない旨の意思表示があった時点で既にデータ解析が終わっている場合など、データから除けない場合もあり、ご希望に添えない場合もあります。
4 研究に用いる情報の種類	年齢、性別、原疾患、合併症、術中の内シャント使用・頸動脈洞反射の有無、術後の過灌流症候群の合併の有無 等 ・ 術中の内シャント：脳への血流を維持する管 ・ 頸動脈洞反射：頸動脈洞への刺激によって起こる動脈圧が下降する反射現象 ・ 過灌流症候群：血液が流れ過ぎるようになった結果、けいれんや意識障害、言語障害や、半身麻痺、しびれなどが出現する病態
5 個人情報の取扱い	収集したデータは、誰のデータか分からないように加工した上で、統計的処理を行います。国が定めた「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に則って、個人情報を厳重に保護し、研究結果の発表に際しても、個人が特定されない形で行います。
6 お問い合わせ先	本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。 照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先： 篠田幸樹（研究責任者）・野崎徳洲会病院・脳神経外科、医師 住所：大阪府大東市谷川 2-10-50 連絡先：(072)874-1641（代表）

2026 年 8 月 4 日作成（第 1.1 版）